

<finir de V.inf.> と <動詞(連用形) + おえる>

安達博明

0. はじめに

finir を [S V X] という構文で使用する際に、X の位置を占める主な要素として SN と *de V.inf.* がある。(01) は SN が X になる用例である。

(01) *Lorsqu'il a fini son travail, il lui reste à le recommencer.*
(09/04/1999)

(01') 仕事をおえる

時制や人称など、個々の用例に固有の要素を捨象すれば、斜字体の箇所に対応する日本語として (01') が考えられる。次の (02) は *de V.inf.* が X になる用例である。

(02) *Plus rares, les épiceries où l'on se fait servir un verre après que la patronne a fini de peser les fruits et refait deux fois l'addition.*
(02/11/1998)

(02') 計りおえる

斜字体の箇所に対応する日本語として (02') が考えられる。以上から次のような対応関係を想定することができる。

(03) <finir de V.inf.> ⇔ <動詞(連用形) + おえる>

(01) と (01') から、*finir* と「おえる」の間に意味上の密接な対応関係が存在することは明らかである。ということは、残りの *de V.inf.* と動詞(連用形) [以下、動詞(連)] を、日仏語対照研究の観点から相互に比較可能な言語形式と認めて共通点および相違点を問題にすることができることになる。しかし、本

稿では **finir** と「おえる」の相違点がすでに解明済みであるという前提に立つて **de V.inf.** と 動詞(連)の共通点や相違点が説明できるという主張を行うのではない。むしろ, **de V.inf.** と動詞(連)の振る舞いを検討し, それが **finir** と「おえる」の比較対照にどのように寄与するかを考察する試みである。なお, 主なコーパスとして, **Le Monde sur CD-ROM 1997-1998** および **1999-2000** を使用した⁽¹⁾。

1. **de V.inf.** および動詞(連)が選択される場合

finir に後続する主要素として **SN** と **de V.inf.** があることは先に述べたが, (04) が示す条件下では, **N** と **V.inf.** は対立関係にあると考えられる。

(04) **V.inf.** は **N** の派生形である。

たとえば (01) の **N (travail)**⁽²⁾ に対しては, (05) のように **V.inf. (travailler)** が存在する。

(05) *Dès que j'avais fini **de travailler**, il fallait que je dépense l'argent pour m'amuser.* (11/01/1999)

それでは 〈動詞(連) + おえる〉についてはどうだろうか。

(06) 部屋に入ると, 議員たちは議論しおえたところだった。

「議論する」は 〈名詞 + する〉 という形式から成る動詞である。この形式を「分解可能な形式」と呼ぶことにする。ところで, (06) の下線部は次のように書き換えてもなお適切であり, 文意が大きく変わることもない。

(07) 部屋に入ると, 議員たちは議論をおえたところだった。

つまり, 「分解可能な形式」では, 動詞(連)は 〈名詞 + を〉 と交替可能である。このことから, 「議論する」と対立するのは, 「議論を」であるとするならば, 「議論」⁽³⁾ と「議論する」の間の関係は, **travail** と **travailler** の間の関係と同じようにとらえることができる。そこで, (04) の **V.inf.** に 〈動詞〉を, **N** に 〈名詞〉を対応させると (08) を得ることになる。

(08) < 動詞 > は < 名詞 > の派生形である⁽⁴⁾。

以下では、(04) および (08) をふまえた上で、de V.inf. や動詞(連)が使用されるのはどのような場合であるかを主に形式的な観点から考察する。

1.1. 動詞へ派生する名詞が存在しない場合

(04) および (08) が満たされている場合、V.inf. および < 動詞 > が存在することになり、de V.inf. や動詞(連)が選択される可能性が生じる。ところが、動詞へ派生する名詞が存在しないという理由から (04) および (08) が満たされない場合がある。

(09) Les soldats avaient fini *de manger*, et ils s'endormaient tous les six, autour de la table. (*Les Prisonniers*)

manger へ派生する N は存在しない。したがって de V.inf. という形式を使用せざるを得ない。では、< 動詞(連) + おえる > についてはどうだろうか。

(10) 先程太郎はレポートを書きおえた。

「書く」に形態素を追加、削除、あるいは置換といった操作を施しても、「(レポートの) X を」の X になる適切な名詞を得ることはできない。この形式を「分解不可能な形式」と呼ぶことにする。すると、「議論する」の場合とは異なり、< 動詞 > と < 名詞 > の対立が存在しないので、動詞(連)という形式を使用せざるを得なくなる。これは分解不可能な形式からなる動詞の特徴と言える。

次に、V.inf. の名詞化が困難であることから (04) が満たされない場合を考えてみよう。

(11) L'affaire Méry et ses multiples rebondissements n'a pas fini *de nous faire réfléchir*. (02/10/2000)

(12) SYLVAIN WILTORD n'a pas fini *d'entendre parler* de son escapade inopinée la semaine dernière. (16/04/1999)

(13) Lu sur ordinateur, ce DVD hybride offre également la possibilité de se connecter sur une sélection de sites Internet consacrés à un sujet qui n'a pas fini *d'être exploré*. (19/04/1999)

(11)・(13) では V.inf. がそれぞれ、「使役」、「知覚」、「受動」を表現しているが、いずれの場合も動詞（あるいはそれに準ずる過去分詞）が 2 つ続くという共通点がある。そこで、V.inf. に相当する範囲を明確にしておく必要がある。

V.inf. は最初の動詞 (*faire, entendre, être*) だけでなく、下線部全体から成ると考えるべきであろう。(11) の「使役」では、*faire* と後続の動詞の間に他の要素が入ることは許されない。後続の動詞が取る目的格の代名詞が *faire* の前まで移動することを考えると、*faire + verbe* があたかもひとつの動詞のように機能していると考えることができる。(12) の場合も *de son escapade inopinée* を *en* に置き換えるとその代名詞は *entendre* の前に移動することから、(11) の「使役」の場合と同じ理由で V.inf. は下線部全体と考えられる。(13) については、(11) や (12) のように代名詞の位置を通して *être exploré* の結びつきの強さを確認することはできない。しかし、*être exploré* は *explorer* と態の上でのみ対立しているだけで、やはり *explorer* の活用の一部であるにとらえることができる。

さて、V.inf. に相当する範囲を明確にしたところで、次に (11)・(13) において V.inf. の名詞化が困難な理由について考察しよう。(01) と (05) では *travail* と *travailler* が対立関係にあると考えられるが、この対立関係が成立するためには (04) が満たされていることと、V.inf. は動詞 1 語のみから成っていることが必要である。ところが、(11)・(13) で V.inf. に相当すると考えられる箇所は複数の動詞（あるいは動詞と過去分詞）から成っている。このことは、形態素の操作による V.inf. の名詞化を困難にしている。したがって、*de V.inf.* という形式を使用せざるを得ない。

ところで、日仏語対照の観点からとりわけ興味深いのは V.inf. が受動の内容を表している (13) である。なぜなら、(14) は容認されないからである。

(14)? その家は大工によって建てられ終えた。

容認されない発話である以上、下線部の名詞化については議論することができない。しかし、〈finir de V.inf.〉と〈動詞(連) + おえる〉の間の相違点につ

いては考察の対象となり得る。そこで、その相違点とはどのようなものであるかについて考えてみよう。

(15) 大工はその家を建て終えた。

(15) は容認可能な発話である。(14) と (15) の違いは、事行⁽⁵⁾の実現に主語が意志を関与させているか否かという点にある。(14) と (15) では、主語が有生物であるか無生物であるかが、意志の関与の有無と関連している。しかし、主語が無生物であることは、意志が不在であるためのひとつの場合に過ぎない。なぜなら、(16) は主語が有生物であるにもかかわらずやはり容認されないからである。

(16)? 太郎は叱られおえた。

「叱られる」というのは通常望ましくないことなので、事行の実現に主語が意志を関与させるということは考えにくい。したがって、事行の内容によっては主語が有生物であっても意志の関与を考慮することができない場合がある。以上から、<動詞(連)+おえる> は主語の意志の関与によって展開する事行がもはや認められなくなるということを表現するための手段であると考えられる。これに対して、(13) から分かるように <finir de V.inf> は事行の実現に主語が意志を関与させるという点について中立であり、任意の事行の展開がもはや認められなくなるということを表現するための手段であると考えられる。この主張を支持する例として (17) と (18) がある。

(17) A l'heure du dernier acte, ce dossier *n'a peut-être pas fini de surprendre*. (19/10/1999)

(18)? この映画は多くのファンを魅了しおえない⁽⁶⁾。

(17) および (18) は主語が無生物という共通点を持つが、<finir de V.inf> の否定形は事行がなお認められるということを表現できるのに対して、<動詞(連)+おえる> の否定形はそれができない。ファンを魅了するのに映画が意志を関与させることはできないからである。

1.2. 動詞へ派生する名詞が存在する場合

(04) が満たされているとき、N と V.inf. の間に常に対立関係が認められるかといえば、そういうわけではない。

- (19) Mais aujourd'hui Zeneca n'a pas fini *de convaincre* les compagnies
détentrices de plus de six autres brevets sur le riz de les abandonner.
(17/10/2000)

V.inf. にあたる *convaincre* には *conviction* という名詞形が存在するが、この名詞を用いて *de convaincre les compagnies* (...) の箇所を *la conviction des compagnies* (...) のように書き換えることはできない。(04) が満たされているにもかかわらず、*travail* と *travailler* のような対立関係を (19) では見出せないのはなぜだろうか。まず、*convaincre* が表す行為を名詞化したものが *conviction* ではない。前者はほぼ「説得する」であり、後者はほぼ「確信」である。次に、*conviction* にはそれをもつ主体が想定される。すると、*conviction* と *convaincre* では主体が異なることになる。つまり、前者の主体は説得される側だが、後者の主体は説得する側だということになる。したがって N と V.inf. では想定される主体が異なることが両者の対立を妨げる原因であると言える。これに対して、*travail* と *travailler* の関係においてはこのようなことは起こらない。*travail* にはそれを行う主体が想定されるが、その主体は同時に *travailler* の主体でもあるからである。また、交替可能性という観点から「議論」と「議論する」の間の関係は *travail* と *travailler* の間の関係と同じようにとらえることができることを指摘したが、(06) と (07) では主語はいずれも「議員たち」であることから、主体の変更が起こらないということも共通点として指摘することができる。

では、名詞形が存在し、かつ主体の変更が認められない名詞と動詞のペア (*travail* と *travailler*) であれば、N と V.inf. は完全に対立関係にあると言えるだろうか。

- (20) Il a fait partie des équipes de fossoyeurs, payés par le ministère des situations d'urgence (MTchS), qui travaillent, vêtus de scaphandres

blancs, par groupes de vingt, surveillés par six hommes du FSB (ex-KGB), une fois que les militaires russes ont fini *leur propre travail*. (24/04/2000)

(20) では、SN は *leur propre travail* である。そこで、N を V.inf. に書き換えるとどうなるだろうか。travail を travailler に書き換えると、形容詞 propre もそれにあわせて proprement にならざるを得ない。ところで、(20) では、propre は「自身の」という意味で用いられているが、travailler proprement だもとの意味を保存できない。<動詞(連) + おえる> においても同じような現象が観察される。

(21) 議員たちは長い議論をおえた。

(21) の下線部を次のように書き換えると容認されない発話になる。

(22)? 議員たちは長く議論しおえた。

したがって、travail と travailler あるいは「議論」と「議論する」のような関係にあるペアでも、N および <名詞> に形容詞が共起していると、V.inf. や <動詞> との対立を考えることができなくなる。結果として、de V.inf. や動詞(連)という形式の選択には意味的なレベルでの制限も関わってくることが予測される。

2. おわりに

本稿では、日仏語対照研究の観点から <finir de V.inf.> と <動詞(連) + おえる> を扱った。V.inf. と N の対立および <動詞> と <名詞> の対立が生じる条件を指摘した上で、de V.inf. や動詞(連)という形式を選択せざるを得ない場合を中心に考察を行った。簡潔にまとめると、まず動詞へと派生する名詞が存在しない場合は de V.inf. および動詞(連)が使用される (manger や「書く」)。次に、動詞へと派生する名詞が存在する場合でも、両者が交代不可能な場合がある (convaincre と conviction)。さらに、名詞と形容詞の関係を副詞

と動詞の關係に置き換えるともとの意味を保存できない場合があることから、de V.inf. や動詞(連)という形式の選択には意味的なレベルでの制限が存在する可能性を指摘した。また事行が受動の内容を表すときは、〈finir de V.inf.〉と〈動詞(連) + おえる〉で容認度に差が出ることを確認した。

〈finir + SN〉および〈名詞 + を〉という形式は詳しく扱わなかったが、今回の指摘を修正、発展させるためにもこれらについては今後の課題としたい。

注.

1. 刊行年月日を記してある用例は *Le Monde sur CD-ROM 1997-1998* および *1999-2000* のものである。その他のものについては出典を記す。また、特にことわりがなければ用例中の斜字体および下線は筆者によるものとする。
2. *travail* の限定辞の問題があるが、本稿では扱わない。
3. 「を」は直前の名詞が文中で果たす文法關係を示す標識であり、フランス語では語順で示されることから、この箇所では削除した。
4. 一般的な名称と区別するためにかっこに入れてある。〈動詞〉は動詞(連)の終止形を、〈名詞〉は〈動詞〉に対応する名詞形を指す。
5. 〈動詞〉および *V.inf.* が中心となって表す内容を指す。
6. 「この映画は多くのファンを魅了してやまない」であれば、問題ない発話となる。

参考文献

- FRANCKEL, J.-J. (1989): "Fin en perspective", *Etudes de quelques marqueurs aspectuels du français*, Librairie Droz.
- 町田健 (1989): 『日本語の時制とアスペクト』, アルク.
- 定延利之(1999): 『よくわかる言語学』, アルク.
- VENDLER, Z. (1967): "Verbs and Times", *Linguistics in Philosophy*, Cornell

University Press.

Corpus : Le Monde sur CD-ROM 1997-1998, 1999-2000

成沢理平 訳注 (1991) : モーパッサン短篇集 (1), 第三書房.

(大学院博士課程後期課程)